不器用で器用な女

zucco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不器用で器用な女

【Ｎコード】
Ｎ０５２３Ｔ

【作者名】
ｚｕｃｃｏ

【あらすじ】
仕事に追われる女、吉川美樹。男前になりつつある彼女はすでに虚しさなんて忘れたはずなのに。
酔っ払いの彼女に手を差し伸べたのは隣に住む年下の男の子。
あまりに突然な行き当たりばったりな出会いは彼女を救うことができるのだろうか。
不器用すぎる彼女は器用に恋ができるだろうか。

癒しを求める女

シーンと静まり返ったオフィスで一人黙々とパソコンに向かう。
肩が痛い。目が乾く。
デスクの隅に置いた滅多に鳴ることのないケイタイはただの時計代わり。
「くっそ！終わんねー。」
口悪く一人呟いたとこで誰に責められるわけもない。
「あ～もうっ！休憩、休憩。」
もちろん独り言。女にしては低めの声がオフィスに響く。
オフィスを出て同じ階にある喫煙所へ向かう。１時間に一回はこのルートを往復している。
喫煙所ではいつも窓枠に腰掛ける習慣もついた。
都内に立地しているビルの7階から見える夜景はそれはもう綺麗のなんの。
こんな夜景を２９歳になって仕事の残業で毎日眺めるようになるなんて、入社直後は思ってもみなかった。
なりたくてなったわけじゃない管理職に就いて早二年。残業三昧で帰社はいつも１０時過ぎ。給料が増えた分失ったものも増えた。
その中でも大きすぎるくらい影響を与えたのは男の存在。
一年前まで付き合っていた男は、今思えばたいて好きだったわけではないけど、それでも一緒にいてそれなりに楽しかった…はず。
『ほんと可愛くないな、お前。昇進して自立した女きどってんの？どうせ結婚したら男に依存するしか能がないくせに』
「ふざけんなっ」
荒く吐いた悪態に灰皿に積もった灰が舞ってしまった。いかんいかん。
だが嫌でも思い出すたびに腹が立つ。
可愛いげのないまでに私の足を痛めつけるパンプスから限界を訴え

るつま先を救おうと力任せに足を蹴ると、憎きパンプスは壁にぶつかり力無く落ちた。
「帰ろう…」
誰が待つわけでもないわが家に。

デスクに戻るとケイタイの着信を示すランプが点滅していた。相手はシュウちゃん。
心のオアシス『Ｂａｒ　Ｋｎｉｇｈｔ』のバーテンだ。しかもまだ２２歳。若い。
「もしもし、シュウちゃん？」
「あっ、ミキさん？まだお仕事？」
「だったけどもう死んじゃう。帰るよ」
「じゃあ帰る前に店寄って。金曜なのに客少なくて」
「ちょっと、私に営業する気？」
「嘘です。ミキさんの顔が見たいから」
可愛いシュウちゃんにそう言われて断れるはずなかろうが。
「分かった。帰りに寄るね」
「やった。待ってます。お気をつけて」
そうと決まれば行動は早い。
散らかったデスクを片付けると一目散に会社を飛び出した。

会社から店までは徒歩１０分ほど。可愛いげのないパンプスのせいでこの距離を歩くのも嫌になるけど、金曜はタクシーがつかまりにくいのでなんとか歩いた。
店のドアを開けると、お客は結構入ってる。若い子を中心に賑やかな店内を歩くと、カウンターにいたシュウちゃんが気づいてくれた。
「お帰りなさい、ミキさん。こちらどうぞ」
案内されたのはカウンターの席。シュウちゃんの正面のこの席に陣取ることはいつものこと。
「お疲れ。人結構入ってるじゃん。シュウちゃんの嘘つき」

ジロっとシュウちゃんを睨むと彼は嫌みのない笑顔を向けた。
「だから、ミキさんの顔を見たかったからって言ったじゃないですか」
小悪魔スマイル。私はそう呼んでいる。
「ほんと上手いんだから」
「本当のことですよ。生でいいですか？」
「うん。お願い。」
元ホストのシュウちゃんは可愛いビジュアルから同年代の若い子から人気が高い。
カウンターに座る女の子の大半はシュウちゃん狙いだ。オーナーの戦略はまんまと狙い通りってわけか。
「徳は？」
シュウちゃんが、生ビールをコースターの上に置いたタイミングで尋ねる。
「徳島さんは裏で仕事してます。」
ここのオーナー徳島は私の知り合い。というか、会社の同期だった。3年前に会社を辞め独立したのだ。
「とか言って、どうせ寝てるんでしょ」
「本業が忙しい時期なんですよ」
徳の本業は別にある。つまり、この店はあいつの趣味でやってるようなものだ。
立ち上げた会社がどれだけ上手くいってるか知らないけど、こっちの店もちゃんとやれ。
徳は前の会社でもトップだった。あいつがまだ会社にいれば先に管理職になったのはあいつの方だ。才能あるやつは何やらしても成功するんだね。
「あ、俺この店に来てちょうど一年目なんです。だからミキさんに感謝を込めて」
そう言ってシュウちゃんは私の前にケーキを出した。
そして呆気なく空いたグラスの変わりに白ワインを置いた。

「まさかこれ」
「高島屋で一番人気のケーキショップで買ったチーズケーキと、こっちの白ワインはドイツのアウスレーゼ９２年ものです」
「すごい！！」
シュウちゃんが朝から並んで買ったと思うと、５００円のタルトなんて三倍いや、五倍は値が付きそう…
アウスレーゼなんて最早いくらになるか想像つかない。
それだけホスト時代のシュウちゃんは人気があった。
「ありがとう」
おばちゃん感動して涙出そうよ。
「ありがとうは俺のセリフです。俺を救ってくれたのはミキさんだ」
シュウちゃんが真面目な顔して言うから柄にもなく顔が赤くなるではないか。
シュウちゃんと会ったのは彼がホスト時代、部下の女子社員率いてホストクラブに行った時のこと。
元々酔った勢いで入ってしまい、テンション高かった私はＮｏ．１とやらを呼べと部下の前で大見栄きった。
そしてテーブルに着いたのがシュウちゃん。
酔った私は何をしたか覚えてなかったけど、後から後輩の松本に「ホステス説教するオヤジがいるのは知ってますけど、ホスト説教する女性は吉川先輩だけですよ」と諌められた。
「いや、救われたっていうけど私何も覚えてなくて」
「じゃあ俺だけの秘密にしておきます。あの時のミキさん、かっこよかったです」
いや、明らかにカッコ悪いだろ。恥ずかしい。
でも、ここで働くシュウちゃんは生き生きしている。やっぱり接客が好きなんだな、って思う。
「よし、終電は諦めた。タクシーコースと決めたらとことん飲むぞ！」
「お付き合いします。」

またも、そこから意識はぐだぐたになったのは言うまでもない。

迷惑な女

なんとかタクシーに乗った。マンションまで着いた。部屋の前まで来た。けど、部屋には入れない。
「な～んで鍵がないのよ」
月曜から酷使された足が限界を越えていた。早くパンプス脱がないと死ぬ。
でも目が回って動けない。
「くっそ！」
ガン！と蹴飛ばしたドアはだんまりしたまま。
あ、今右足死んだかも。
ズルズルと座り込みドアを睨みつけた。
「あ～ん、シュウちゃ～ん」
可愛い可愛いシュウちゃんはここにいない。誰も助けてくれない。
「うるさいよ、アンタ」
聞こえたのはシュウちゃんとは真逆のつっけんどんな低い声。
隣のドアが開いていてそこから若い男が顔を覗かせていた。
「さっさと部屋入れよ」
「入れないのよ。鍵がないの」
「じゃあホテルにでも行けよ」
「動けないのよ。足が痛くて」
「じゃあ静かにしてろよ」
可愛く言ってみたけど全然可愛くないし、しかもこんな若僧にこんなこと言われるなんて。
「アナタの部屋に入れてくれたら静かにするわ」
何言ってんだ、自分。でも、もうすぐ4月とはいえまだ夜は冷える。
このままだと先に殉職した右足を追って本体まで死ぬる。
「何言ってんの、アンタ」
的確なツッコミありがとうございます。でもここで死ぬわけにはい

かないのよ。
「アナタこそ、人が困ってんのに見捨てるの？」
「見知らぬ人間入れるわけないでしょ」
そう言われて私は鞄から名刺取り出して突き付けた。
「瑞穂商事営業部第三課課長、吉川美樹。身元は明らか！立派な会社員です」
名刺を受け取った若い男は呆れたように私を見た。
「だからと言って」
「恩は売っといて損はない！」
遮るように言うと、彼は近づいて私に手を差し延べて立つように促した。
死んだとおもった右足はまだ生きてたけど、つま先に痛みが走った。
瀕死なのは確かだ。
「男の部屋入って、何されても文句言うなよ」
「君が？私を犯す？」
ぷーっとわざと声にだして笑った。冗談はやめてほしい。
「やれるもんならやってみなさいよ、若僧」
「それが助けられる人間の言うことかよ」
「フカフカのベッドで寝かせて下さいって言ってるわけじゃないの。マンションの管理人が来るまでの間、あと数時間部屋に入れて下さいって言ってるのよ」
「玄関に寝かすぞ」
「せめて暖かい場所にして」
「分かったから来いよ」
男は私の手を引くとドアの内側に入れてくれた。

いい歳こいて他人に迷惑かけるなんてと、酔っ払った頭の隅に微かに残ってた理性が反省してる。けど、この歳だからこそ厚かましくもなれるもんなのよ。

脱力する女

若僧くん、改め各務くん。むこうが名乗ったわけじゃなく表札を確認しただけ。
歳はかなり若い。シュウちゃんと同じくらいだろうか。
男の部屋に入るなんて久しぶり過ぎて感慨深い。できれば胸キュンなシチュエーションが希望だったが酔っ払いが言えた身分じゃない。
とりあえず入れてもらえた玄関は意外と整理されている。靴なんかはキチンと並べられて恐らく普段使い以外は全て靴棚の中だろう。
そして玄関から見える室内も…キレイだ。性格が表れているならば私はコイツとは気が合わない。多少散らかっててこそ落ち着く我が家とは雲泥の差。
部屋に戻ったっきりの各務くんはこちらに顔を出すことすらしない。
どうやら今日の寝床は本当にこの玄関のようだ。
こうなったら一番大事にしてそうな靴を枕がわりにして涎垂らしてやる。
そう思ってた矢先、ケイタイが鳴った。鞄の中で音はするが姿を見せないケイタイちゃんを探すために中身をポイポイと当たりに投げる。
ようやく姿現れた携帯ちゃん。着信はさっきまで癒しを与えてくれたシュウちゃん。
「もしもーし」
「ミキさん？お家ちゃんと着きましたか？」
そういえばタクシー乗る前にシュウちゃんから「家に着いたらちゃんと連絡してくださいね」と念を押されていた。
酔っ払って真夏の公園で夜を明かした事を笑って話してから心配性のシュウちゃんが私に義務付けた習慣だ。
「お家には目と鼻の先なんだけど強烈な運の悪さで阻まれたの」
「ミキさん、分かりやすく言ってもらえませんか？つまり家には着

いてないってこと？」
いつも柔らかいシュウちゃんの声色が今はとても冷たく聞こえる。
あー、怒られる。
「大丈夫。ちゃんと室内にはいるのよ？」
各務くんとやらの家だけど…
「怒らないからちゃんと言ってください」
痛くないからと言って注射針むけてくる医者ほど信じられないという心理。分かる？シュウちゃん。
「いや、だから」
言いかけてケイタイちゃんがピピピピとけたたましい音をだして臨終宣言。
助かった…
「おい、人ん家入ったら大人しくしてるんじゃなかったのかよ」
電池切れのケイタイを握り締めたまま顔を上げると家主の各務くん。
「っーか男いるんならソイツに助けてもらえよアホ女」
なんて気持ちのいい悪態つくのかしら。でもシュウちゃんは男じゃないの。可愛い男の子なの。
そう、こんなとき助けてくれる男なんてもっていないのよ。哀しいかな、アホ女と呼ばれたことに否定はできない。
仕事しか脳のない、女ではアホの部類。
仕事がなんだ。肩書がなんだ。何一つ救いになんてなりゃしないそれに縋るしかないアホで悪いか。
「なんとか言えよ…」
各務くんはそっと私の頬を拭った。
「ひでぇ顔」
ヤバイ、ついに体そのものに力が入らなくなった。各務くんの親指に水分。
ああ、あれは私から出た無力の表れだ。

充電する女

最悪の金曜は意外な展開で幕を閉じた。いや、マンションに着いた頃は日付が変わっていたから土曜日含む、だ。
見慣れた天井なのはここが私の家と同じマンションの一室だからか。
違うベッド、違うカーテン、違う家具たち。
そして何も知らない男の子。
各務くん。下の名前は悠斗と言うらしい。
教えてもらったのはこれくらい。
「しょうがねーな」
悠斗はそういって玄関で座り込んでいた私を抱き抱えてベッドへ運んでくれた。
そして傷ついた右足に絆創膏を貼ってくれる悠斗の顔を上から見下ろすようにまじまじと観察させてもらった。
長い睫毛が影を作ってる。ぱっちりとした二重のイケメン君は見ず知らずの女に臆する事なく介護できるほど女に慣れてる模様。
この整理整頓された部屋もきっと彼女がやってくれてると信じたい。
そうでなければ可愛いげがなさすぎるよ、君。
「ったく、本当に面倒な女だなアンタ」
それでも、口の悪い年下のガキんちょは突然やってきた訳の分からないアホな女に親切すぎるほど親切で。
この都会で人の優しさというものに触れるなんて…とじんみりしてたら押し倒された。
「言っただろう？何されても文句言うなって」
ああ、無常。
でも、彼がそう言わなきゃ私が手を伸ばしていたかもしれない。
助けてくれって。
きっと私もさっきのケイタイ同様、だいぶ前から電池切れかけてた。
電気泥棒上等。今は一次凌ぎだろうと充電させて欲しかった。

男の子の髪ってこんな感触だったのかぁと胸を愛撫する彼の頭を撫でてみる。
「ねぇ、君いくつ？」
「歳聞いてどうすんの？やめんの？」
あら、そんなことはしないわよ。まぁ、行きずりに歳は関係ないけどさ。
「良好なご近所関係のためにも一応…ね。流石に１０代ではないとは思うけど」
だとしたら私は豚箱まっしぐらよ。最近の若い子は大人っぽいから見た目じゃわかんないの。
おばちゃんからみたら皆若い子。
「…２０代」
「あら私と一緒。首の皮一枚のギリギリ２０代。」
慣れてるとはいえ熱っぽい手つきにこちらも興奮しだす。
男の子と男の人の丁度中間かな。大学生か。
「アンタ、首筋から良い匂いするね」
「ミキ、よ。名刺渡したでしょ。ちゃんと額に飾ってよね」
ふっ、と笑った時彼の腹筋が目に入った。あぁ、私にない男の体。
それに反応した私の中の女。だいぶ長いこと眠らせてた本能が燻りだす。
「ねぇ」
「もう黙れよ」
形のいい唇が重ねられ言葉は出なかった。

眠ったのは朝方で、まだ3時間ほどしか経っていないが私の目は完全に冴えていた。
隣の悠斗はまだ夢の中。ふっ、３～４時間の睡眠に慣れた企業戦士を舐めるなよ。

ベッドから起き上がって鞄のメモ帳を取り出し彼へ感謝の言葉を書き残す。
いやぁ、散々迷惑おかけしましたよっと。
まさか年下男子まで食せるなんて棚ボタもいいとこ。
ごちそうさまでした。

もう管理人が来てる頃だ。とりあえず帰ろう。目と鼻の先に待つ散らかった我が家へ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0523t/

不器用で器用な女

2011年5月11日00時49分発行